

Title	地上の彗星 : 天文小品
Author(s)	ZM
Citation	天界 = The heavens (1932), 12(138): 354-356
Issue Date	1932-09-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/162263
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

地上の彗星 (天文小品)

Z M 生

天文臺長は屋上ドームのスリット(長窓)をいつばいに開けて、變光星の觀測が終ると、極まつて「彗星ぞ座んなれ」と、眼を見据へて待ち構へて居るが、一向夫れらしいものが見えない。『自分は日中忙しい思ひをして、やつと自由な時間が來たので熱心にレンズを覗いてゐるのに、いつたい何うしたといふのだ。地上の不景氣は歴史あつて以來だが、天上までも斯うも不景氣なのか。來る夜も來る夜も何の收穫もなく、悪くすると空模様^{いづ}に騙されて毎時も待ちぼうけだ。あゝまた曇りだした』

ブツブツ云ひながら臺長は階段を降りて來た。

聽て店の帳場の椅子に凭れて、煙草を吹かし乍ら表通りの不景氣相を一涉り眺め廻して居ると、だしぬけに、客『今晚は』臺長『何方ですか』前垂掛の振つた臺長はやをら身を起して進み出す。客は名刺を片手に差出して『甚だ突然ですが、急に思ひ付いて御訪ねしました』臺長『やあ天文同好會の〇〇さんですか。御名前は豫て承知しておりましたが、始めて御目に懸ります。よく御訪ね下さいました』

此所では天上の彗星ならぬ地上の彗星が訪れたのだ。先づ「こちらへ御上り下さい」と、臺長は客と對座して語り出した。『今日何所から御出發でした』客『東京に用事が出來ましたので一昨日上京しましたが、今朝迄に大體用事が済みました。日頃御逢ひしたいと思つてゐましたので、御迷惑でせうが、突然御訪ねしました』『あゝ左様ですか、御疲れでせう。』客『有り難ふ、旅行は慣れてゐますので左程でもありません。上田市は今晚初めて來たのですが、只今停車場から上つて参ります途中拜見しますのに、なかなか繁華な街で驚ろきました』臺長『夜景は何所でもよく見えるものです。(苦笑。)兎も角も停車場から眞直に上つて來る此の通りが當市の商業街で目貫通なのです。それにしても拙宅がよくお分りでしたな。』客『えゝ、汽車から降りて一寸道を聞いたのです。此處まで來ると屋上のドームが見えたので、直ぐに分りま

した。』客は臺長の案内で屋上のドーム内に入り、頻りと天體の觀望をし、ドームの構造や天體に關する説明を聽いた。その後、別室で各地の同好者の消息や天文談に花を咲かせた。

客『貴下の天文研究は何年頃からですか』 臺長『左様十五六歳の頃からです。約三十年位になりませう。』 客『さうすると私が生れぬ前の事ですな』

臺長『左様大分古い事になります』 臺長は新聞の切抜帳を示し『此スクラップを御覽下さい』 客『なかなか細かによく貼られてゐますな。如何にも、明治三十六年頃の新聞記事等がありますが、いつたい何んな御積りでこんなに澤山な新聞記事を保存されるのですか』 臺長『私は新聞記事には特別な注意を怠らない積りです。自分の趣味に關した事柄で、保存されたこれ等の記事は生きた社會の歴史です。同じ記事でも、専門雑誌に掲げられたものと、新聞紙に發表されたものとは大分意味を異にしてゐます』 客『成程』 臺長『専門雑誌に發表されたものは會員とか研究趣味者を對手としたものですが新聞では社會大衆に公表するのですから。然かもこれが専門家によつて執筆されたものとなると専門外の一般人は其全部を受け入れるのですから新聞紙上に公表するに付ては深甚な考慮を拂はねばなりますまい』 客『御話はなかなか面白いですな。失禮ですが貴下は此種の専門教育を御受けになつたのですか』 臺長『いえ私は専門教育は勿論のこと、中等教育さへ受けていないので、純然たる素人です。それ故、學界に對しては自由な立場で、何等拘束を受くる點は無いのです。』

成程聞けば此の自稱天文臺長なかなか勝手な事を云ひ出す。客も思はず知らず話に釣ひ込まれて途切れそうにも見えない。かれ此れ眞夜中の一時頃にもなつた。客『大分遅くなりましたので御暇したいと思ひます。御家の方の御迷惑にもなることですから』 臺長『何、構ひません。こんな事は毎度です。お互に星に親しみを持つものは夜の遅い位には驚きません。今頃は家内中皆よく寢込んでゐませう。』 客は立ち掛けた腰を落ち付けて、また一時間餘りも話し續けた。客『程なく夜明けになりませう。御暇します。是非私の方へも御出掛け下さい。』 臺長『有り難ふ。御縁があれば又御逢ひ出來ませう。』

客『左様なら』 臺長『御機嫌よく。』 臺長は次第に遠ざかり行くその後姿を

見詰て、それが橢圓軌道を行くのか、但しは拋物線軌道を走るのか、ちつと考へて居る。

漂然として來り 漂然として去るこの地上の彗星は、東の方が白んで曉の星が消える頃は、既に上田市を離れて遙か西の方に飛び去つてしまつた。夕闇に星光りのきらめく今夜は二百里も先に居る筈だが、思へば又いつの日に逢ふことやら。

廣 島 だ よ り

T O 生

山本先生が6月中旬より廣島文理科大學の天文學講師として御滞在されるので、支部として何か催したいと願つて居りました。

座 談 會

6月22日19^hより高師の第一會議室で座談會を催しました。集る者約30名、熊野氏の御挨拶に續いて“宇宙の爆發”と題して山本先生の御講話がありました。自己紹介の後茶菓を喫し乍ら座談に移りました。

太陽、月の裏面と生物、月の餘命、月世界探險、廣島天文臺建設の事等々話をつきませんでした。

22^h 30^m頃、有益であり、ゆかいだつた此の會を終りました。

講 演 會

6月24日 8^h 30^mより文理科大學大講堂に於て、天文講演並に映畫の會を開きました。定刻前より押掛けた人々正に600名突破の大盛況です。

開會の辭に續いて“宇宙の開闢論”と題して山本先生の御講演があり、少憩の後先生の御説明で獨逸ウファ社特作の“宇宙の驚異”全12巻を映寫しました。今更乍ら宇宙の偉大さ、神祕と嚴さに胸を打たれ、そして造物主を讚美し乍ら閉會したのは22^h 過ぎでありました。